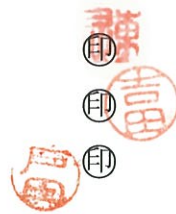


(別記様式第5号)

論文審査の結果の要旨

報告番号	博(生)甲第314号	氏名	孟偉
学位審査委員	主査 連清吉 副査 吉田謙太郎 副査 戸田清		
論文審査の結果の要旨			
<p>孟偉氏は、2010年4月に長崎大学大学院生産科学研究科博士後期課程に入学し、現在に至っている。同氏は、生産科学研究科に進学以降、環境科学を専攻して所定の単位を修得するとともに、京都中国学の性格、とりわけ吉川幸次郎の中国文学を形成される環境を中心に研究し、その成果を2014年7月に主論文「吉川幸次郎の中国古典文学研究」に関する研究として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文3編（うち審査付き論文3編）を付して、博士（学術）の学位の申請をした。長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、2014年7月16日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を2014年9月3日の生産科学研究科教授会に報告した。</p> <p>本研究は吉川幸次郎の中国古典文学研究の在り方と真髓を明らかにしようとし、まず、吉川幸次郎がどのようにして言語により雑劇の文学的価値を分析し、元王朝の社会雰囲気という事実を通して元王朝の雑劇作者の愚直な心理や澁刺たる精神あるいは逞しさを究明することで、雑劇作者の創作心理を探求しようとしたかを考察する。そして吉川幸次郎の中国学研究の生涯を把握した上で、彼が精神史の一環とする『元雑劇研究』から、文学の尊厳を追求する杜甫の研究へと一つの転換を果たしたことを論じ、その転換を手掛かりとして、吉川幸次郎の『元雑劇研究』と杜甫の研究を繋ぐことで議論を展開する。吉川幸次郎が杜甫の言語運用と辞義の修飾を主軸としてどのように杜詩を解釈し、杜甫の深層心理について探求し、杜甫の心象風景を解説したかを論じる。最後に、吉川幸次郎の杜甫研究を中国の錢謙益、仇兆鰲、日本の森槐南、鈴木虎雄らの杜甫研究と比較し、その継承関係と吉川幸次郎の独創的な見解を論じ、吉川幸次郎の杜甫研究の日中近代杜甫研究における位置付けを試みる。結論として、吉川幸次郎の中国古典文学研究は、言語や言語が表現する事実を見つめ、文学の外在形式を透き通り文学の中核に入り、主体と客体とを融合する「境界」に達する人間研究だと言える。その研究体系は以後の文学研究ないし漢学研究に強い影響を与えるという意義がある。</p>			

本研究は、吉川幸次郎の元雜劇研究と杜甫研究には如何なる特色があるか、彼の研究が日本ないし中国近代においてどのような位置を占めているか、彼の研究方法とは何かなどの諸問題について、吉川幸次郎の学問の在り方と真髓を究明するができ、評価されて然るべきである。

学位審査委員会は、中国の人文社会環境学の分野において極めて有益な成果を得るとともに、京都中国学派、とりわけ吉川幸次郎の中国学研究の在り方および日中の中国古典文学研究における位置づけを究明することは、博士（学術）の学位に値するものとして合格と判定した。